

上映スケジュール

★：愛知県美術館蔵 ※：アートライブラリー蔵 ○：大野一雄ビデオ・ライブラリー（アートライブラリー蔵）
 「愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品」は、文化情報センターによる実験的な映像作品の制作プログラムとして1992年の開館時にスタート。センター内の組織改編に伴い、2014年より、愛知県美術館が映像作品として収蔵するとともに、制作を継承しています。

10/20 [水]	17:00	【オリジナル映像作品】の声①	森弘治『Case Study』 2012年、9分、デジタル、第21作 ★ 田村友一郎『アポロンの背中』 2016年、20分、デジタル、第25作 ★ ミヤギフトシ『音と変身／Sounds, Metamorphoses』 2020年、58分30秒、デジタル、第29作 ★ 計87分30秒
	19:00	作り手たちの声①	野田真吉『くずれる沼 あるいは 画家・山下菊二』 1976年、38分、DVD(オリジナル16mm) 鈴木志郎康『日没の印象』 1975年、24分、Blu-ray(オリジナル16mm) 提供：イメージフォーラム 計62分
10/21 [木]	16:45	写し出された声①	章夢奇(ジャン・モンチー)『自画像：47KMの窓』 2019年、110分、Blu-ray 提供：山形国際ドキュメンタリー映画祭
	19:00	写し出された声②	章夢奇(ジャン・モンチー)『自画像：47KMのフィンクス』 2017年、94分、Blu-ray 提供：山形国際ドキュメンタリー映画祭
10/22 [金]	15:30	【オリジナル映像作品】の声②	和田淳子『ボデイドロップアスファルト』 2000年、96分、デジタル、第9作 ★
	17:30	作り手たちの声②	ジョナス・メカス『ロスト・ロスト・ロスト』 1975年、180分、Blu-ray(オリジナル16mm) 提供：株式会社ダグレオ出版
10/23 [土]	13:30	写し出された声① 再上映	章夢奇(ジャン・モンチー)『自画像：47KMの窓』 2019年、110分、Blu-ray 提供：山形国際ドキュメンタリー映画祭
	15:45	写し出された声② 再上映	章夢奇(ジャン・モンチー)『自画像：47KMのフィンクス』 2017年、94分、Blu-ray 提供：山形国際ドキュメンタリー映画祭
	17:45	作り手たちの声③	ジャン＝リュック・ゴダール『映画史』 1988-98年 ※ 第1章=1A「すべての歴史」 51分、DVD 第2章=1B「ただ一つの歴史」 42分、DVD 計93分
10/24 [日]	13:30	小特集 1	野田真吉『水谷勇夫の十界彷徨』 1984年、34分、16mm、サイレント 制作：なごや絵学校 撮影：大塚正之 註：本作は過去の印刷物等で「水谷勇夫の世界・十界彷徨」とされていますが、ここでの表記は実際のプリントに準拠しました。
	14:30	〈水谷勇夫の映像世界〉	水谷イズル講演 (60分) 野田真吉『水谷勇夫の十界彷徨』アウトテイク 1984年、30分、16mm、サイレント 計90分
	16:30	フィルム、テープ提供：水谷イズル	「野田真吉監督講演」 於：なごや絵学校、1983年、約60分、録音テープ
10/25 [月]	休館		
10/26 [火]	16:15	【オリジナル映像作品】の声③	小森はるか『空に聞く』劇場版 2018年、72分、デジタル、第27作 ★
	18:00	【オリジナル映像作品】の声④	草野なつか『王国(あるいはその家について)』150分版 2018年、150分、デジタル、第26作 ★
10/27 [水]	16:30	大野一雄の声	『ロングインタビュー』 1993年、100分、ビデオ 撮影：NHK ○
	18:30	大野一雄と慶人の声	ジャンニ・ディ・カブア『Antologia』 Part1 46分、Part2 71分 1999年、ビデオ ○ 計117分
10/28 [木]	16:00	オリジナル映像作品】の声⑤	草野なつか『王国(あるいはその家について)』64分版 2017年、64分、デジタル、第26作 ★
	17:30	作り手たちの声④	キドラット・タヒミック『虹のアルバム～僕は怒れる黄色'94』 1994年、175分、ビデオ(オリジナル16mm) ※
10/29 [金]	18:00	小特集 2 〈出光真子の実験 映画とビデオ・アート〉 ①「私的映像の世界」	『おんなのさくひん』 1973年、10分50秒、ビデオ 『At Yukigaya 1』 1974年、3分、ビデオ(オリジナル16mm) 『At Santa Monica 3』 1975年、15分30秒、ビデオ(オリジナル16mm) 『わたしのアメリカ、あなたのアメリカ』 1980年、10分、ビデオ(オリジナル16mm) 『父の情景』 1981年、5分50秒、ビデオ(オリジナル16mm) 『たわむれときまぐれと』 1984年、15分50秒、ビデオ(オリジナル16mm) 『ざわめきの下で』 1985年、10分50秒、ビデオ(オリジナル16mm) 提供：スタジオ・イデミツ 計71分50秒
	19:30	小特集 2 〈出光真子の実験 映画とビデオ・アート〉 ②「アーティストとのコラボレーション」	『アニメス パート1』 1982年、13分10秒、ビデオ ★ 『アニメス パート2』 1982年、19分40秒、ビデオ 出演：岸本清子 ★ 『At Any Place 4 ヨネヤマ・ママコ「主婦のタンゴ」より』 1978年、12分30秒、ビデオ(オリジナル16mm) 『Something Within Me』 1975年、9分30秒、ビデオ(オリジナル16mm) 音楽：高橋アキ 提供：スタジオ・イデミツ(★を除く) 計54分50秒
10/30 [土]	13:30	小特集 2 〈出光真子の実験 映画とビデオ・アート〉 ③「ドキュメンタリーへの志向」	『サム、聞いているの?』(武満徹編、高松次郎編A、同B、富岡多恵子編) 1974年、60分、ビデオ *画家・サム・フランシスに関するインタビュー 『Woman's House』 1972年、13分40秒、16mm 提供：スタジオ・イデミツ 計73分40秒
	15:00	2つの『サン・ソレイユ』①	クリス・マルケル『サン・ソレイユ』 1982年、100分、Blu-ray (オリジナル16mm) 提供：株式会社パンドラ
	13:30	2つの『サン・ソレイユ』②	クリス・マルケル『サン・ソレイユ』日本語ナレーション版 1982年、100分、16mm ナレーション：池田理代子
10/31 [日]	15:45	声の引用	ストロープ＝ユイレ『セザンヌ』 1989年、51分、35mm 所蔵：神戸ファッション美術館 ストロープ＝ユイレ『ルーブル美術館訪問』 2004年、48分、35mm 提供：アテネ・フランセ文化センター *2本ともジョワジャン・ガスケのテキストに基づく 計99分

◎やむを得ない事情によりプログラム、上映時間等を変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

会場 愛知芸術文化センター 12階アートスペースA
〒461-8525 名古屋市中区東桜1-13-2

主催 愛知県美術館
Tel.052-971-5511(代) Fax.052-971-5604
https://www-art.aac.pref.aichi.jp

アクセス 地下鉄東山線・名城線「栄」駅下車／名鉄瀬戸線「栄町」駅下車
オアシス21連絡通路利用徒歩3分



章夢奇(ジャン・モンチー)『自画像：47KMのフィンクス』2017年 写真提供：山形国際ドキュメンタリー映画祭

ART FILM FESTIVAL

vol.25

第25回 アートフィルム・フェスティバル
 2021年10月20日(水) — 31日(日) *10月25日(月)休館
 会場：愛知芸術文化センター 12階 アートスペースA
 定員：90名 (新型コロナウイルス感染拡大状況により変動する場合があります)
 主催：愛知県美術館

特集
 映画の声を聴く

aomaa
aichi architectural museum of art

AICHI ARTS CENTER

入場無料



第25回 アートフィルム・フェスティバル
2021年10月20日(水) - 31日(日) ※10月25日(月)休館

1	2	3
	4	6

1. 章夢奇(ジャン・モンチー)『自画像:47KMの窓』2019年
2. ミヤギフトシ『音と変身／Sounds, Metamorphoses』2020年
3. 小森はるか『空に聞く』劇場版 2018年
4. ストローブ=ユイレ『ル=ブル美術館訪問』2004年
5. ジョナス・メカス『ロスト・ロスト・ロスト』1975年
6. ジャン=リュック・ゴダール『映画史』1988-98年

特集

映画の声を聴く

「アートフィルム・フェスティバル」は、実験映画やビデオ・アート、ドキュメンタリー、フィクション等、従来のジャンル区分を越えて、独自の視点からプログラムを構成する特集上映会です。

今回の特集テーマは、〈映画の声を聴く〉。1895年に誕生した映画は、音声を伴わないサイレントの表現として始まりました。今日私たちが親しんでいる、映像と音がシンクロした映画が成立するのは1930年代以降ですが、まだサイレント映画の1920年代に、映画は既に第一の黄金時代を迎えています。そのため映画ファンの中には、音声をあまり重視しない向きもありますが、一方でジョナス・メカスの日記映画やクリス・マルケルのエッセイ・フィルムのように、極めて独特で印象的なナレーションの作品もまた存在します。彼らから鈴木志郎康、

キドラット・タヒミック、ジャン=リュック・ゴダール、ストローブ=ユイレらを経て、草野なつかや小森はるか、ミヤギフトシ、章夢奇(ジャン・モンチー)ら近年の注目すべき作家までを取り上げ、音声表現の魅力を持つ映画の系譜をたどります。

公立文化施設が一年一本のペースで継続的に自主制作を行うユニークな企画として知られる「愛知芸術文化センター・愛知県美術館オリジナル映像作品」は、近年、映像作家や映画監督と美術家が競い合うように制作を担当していました。しかし、ここに「声」という視点を導入した時、こうした二項対立が解消し、両者が相互に通底するような、新しい景色が見えてくるのではないのでしょうか。本特集が映像作品や映画の見方が変わる、一つの契機になれば幸いです。

小特集 1 水谷勇夫の映像世界



野田真吉「水谷勇夫の十界彷徨」(1984年)制作風景(左:水谷勇夫、右:大塚正之カメラマン)



野田真吉「水谷勇夫の十界彷徨」(1984年)制作風景(野田監督は、右から3人目。写真提供:水谷イズル)

愛知を拠点に活動した画家・水谷勇夫(1922～2005年)は、美術に留まらず、公演芸術や映画、民俗学研究など、複数の領域と関わりを持つ、マルチ・アーティスト的存在でした。昨年、当館で「小企画 水谷勇夫と舞踏」展を行い、土方巽、大野一雄らの舞踏家との交流にフォーカスしました。本上映会では、日本におけるドキュメンタリー映画のパイオニアの一人で『マリン・スノー - 石油の起源』(1960年)などの作品で知られる野田真吉(1911～1993年)が監督した、『水谷勇夫の十界彷徨』(1984年)に焦点を当てます。当時、水谷が試みていた「凍結絵画」の制作過程を記録した本作は、映画完成の年に開催された「水谷勇夫展 十界之内 蠅と食卓」(於:日本画廊、東京)で上映されました。その後は正確な記録がないため不明ですが、ほとんど上映されておらず、本上映会は貴重な鑑賞機会となるでしょう。本編に使われなかった「アウトテイク」の上映や、水谷勇夫のご子息でアーティストの水谷イズルを招き講演を行い、この作品の謎に迫ります。

小特集 2 出光真子の実験映画とビデオ・アート



出光真子「アニムス パート1」1982年



出光真子「アニムス パート2」1982年

令和元年度に当館が『アニムス Part1』『同 Part2』(1982年)を収蔵した出光真子は、日本における先駆的な映像作家でビデオ・アーティストの一人として評価されています。彼女は、実験映画では繊細な感性で光をとらえた美しい映像が、ビデオ・アートでは画面内にモニターを設置し、登場人物とモニター内の映像が相互に関連づけられる独自の「マコ・スタイル」と呼ばれる表現が知られています。しかし彼女の映像表現は、フィルムとビデオで二つのスタイルが並走していたとは言い切れず、フィルム作品『At Any Place 4 ヨネヤマ・ママコ「主婦のタンゴ」より』(1978年)が、人物を合成する手法において『アニムス』との関連を見せるといった、相互的な関係を認められるのです。本プログラムが、フィルムとビデオの垣根を越えた、新しい作家像を見出す契機となれば幸いです。なお当センターでの出光作品のまとまった上映は、開館記念事業の上映会「家族の映像」(1992年)以来となります。

感染症拡大防止策を実施
のうえ開催いたします。

- * 発熱や咳、くしゃみなど風邪の症状の見られる方や、体調のすぐれない方は、ご来場をお控えください。
- * ご来場の際は必ずマスクをご着用ください。未着用の方はご入場をお断りする場合があります。
- * ご入場前に検温を実施します。37.5℃以上の発熱のある場合はご入場をお断りします。
- * ご来場前のごまめな手洗いや、手指の消毒にご協力ください。
- * やむを得ない事情によりプログラムを変更する場合がありますが、あらかじめご了承ください。
- * 場内で新型コロナウイルス感染症の感染が確認された場合は、当館ウェブサイトでお知らせします。ご自身でご来場日時の記録をお願いします。